チュユ語の音韻体系

西　田　文　信

0. はじめに

四川省西部を南北に縦断するように複雑な地形が連なる山岳地帯は、その歴史的・民族的な背景から、費孝通（1980）によって「川西民族走廊」と名付けられた。この地域は古来より多くの民族が移動を繰り返し、さまざまな少数民族が集住している。現在この地域は、主にチベット族・羌族・彝族が多く居住しているが、以上のような背景に絡んで多くの少数言語が存在する。その中で、川西民族走廊に分布するチベット・ビルマ系少数言語をまとめて「川西走廊諸語」と呼ぶ。

本稿で考察するのは、これまで未記述であったチュユ語リタン（理塘）方言の音韻体系である。筆者は2007年9月に2週間、中華人民共和国四川省甘孜蔵族自治州理塘県絨埧郷増達村にて現地調査を行い、チュユ語の基礎語彙・音韻調査及び文法の初歩的調査を行った。本稿はその調査結果の報告と音声・音韻の記述・分析を目的とするものである。収集した語彙数が1500語余りと少ないため、初期報告に過ぎないことをお断りしておく。

1. チュユ語の背景

チュユ語（漢語では「却域語」、英語ではChoyo、Cyoyu、Chuyu、Queyuとも表記される。また自称は［ᴿperi］［ᴿpori］等）は、中華人民共和国四川省甘孜（チベット語表記ではGarzê、以下同様）蔵族自治州の新龍県（Nyagrong）、雅江県（Nyagquka）及び理塘県（Litang）に分布している所謂「川西民族走廊諸語（Languages of the Ethnic Corridor）」のひとつである。上記の三県のボーダーの地域で話されているためこの名がある。また、かつて陸（1985）によって報告された扎巴語は、黄

（1991a, b）に拠ればチュユ語の一方言であり、現在では隣接地域で話されている扎壩語（ダパ語）とは別言語であると考えられている。

チュユ語の話者人口は約 7,000 人（王 1991：46）。その多くはチベット語カム方言と漢語を流暢に操る。今回の調査で、この言語は小学生児童間でも活発に話されており若年層でもよく保持されていることが確認できた。民族識別後、チュユ語話者はすべてチベット族に分類されている。大部分はチベット仏教を信仰するが、一部多神教信者も存在する。

チュユ語の言語系統は図 1 の如くシナ＝チベット語族・チベット＝ビルマ語派・羌語支（孫 2001：160）とされるのが一般的であるが、その下位分類に関しては検討の余地がある。系統的には扎壩語と近い関係にあると考えられ、漢蔵祖語（Proto-Sino-Tibetan）を考える際にも重要な鍵となる言語であると筆者は考える。

以下では、中華人民共和国四川省甘孜蔵族自治州理塘県絨埧郷増達村にてテンダ（登達）氏（男性、調査当時 58 歳）を主たるコンサルタントとして収集した言語データの分析結果を報告する。

2. チュユ語の特徴

チュユ語は膠着語で SOV の語順を有する。しかしながら、述語が文末に立つという厳格な文法的制約に違反しない限り、その他の構成要素の順序はかなり自由である。形容詞及び数詞＋類別詞が主要部（名詞）に後続する。後述の通り、子音連続が多く、4 つの声調を有する。形態統語論に関しては、概ね隣接するダパ語とパラレルであるが、動詞語幹の中にはチベット語とは明らかに系統を異にするものが存在し、また述語形式（助動詞）や助詞の中にはチベット＝ビルマ諸語の古い形式と同定できるものもあり、また、epistemic verbal category には非常に興味深い現象を有する言語であるので、この分野では非常に貴重なデータを提供してくれる言語である。

3. 音韻体系

3.1 音節構造

チュユ語の音節構造は以下の如くである：

$$^{C}C_{i}GVC$$

（preinitial ^{C}：preaspiration, prenasal, approximant and obstruent; main initial C_i：all the consonants; syllable core V：all the vowels; glide G：high vowels；final C：N, /r/, /j/）

以下では、これらの成分の位置にどのような音素が立ちうるかを検討してゆく

3.2 子音

	Bilabial	Dental	Alveolar	Retroflex	Palatal	Velar	Uvular
Voiceless stop	p	t				k	q
Voiceless aspirated stop	ph	th				kh	qh
Voiced stop	b	d				g	G
Voiceless affricate		ts		tr	c		
Voiced aspirated affricate		tsh		trh	ch		
Voiced affricate		dz		dr	dj		
Voiceless fricative	f	s	sh	sr	sj	X	X
Voiced fricative	v	z	zh	zr	zj	g’	G’
Voiced nasal	m	n			nj	ng	
Voicelss nasal	hm	hn			hnj	hng	
Voiced approximant	w	r			j		
Voiceles approximant		hr					
Voiced lateral		l					
Voiceless Lateral		hl					

閉鎖音：

/p/	[p]	^{H}pə	‘sun’
/ph/	[pʰ]	^{H}phə	‘gray’
/b/	[b]	^{H}bə	‘leaf’
/t/	[t]	^{H}to^{L}ro	‘one’
/th/	[tʰ]	^{H}tho	‘meat’
/d/	[d]	^{L}do	‘lamp’
/k/	[k]	^{H}ku	‘year’
/kh/	[kʰ]	^{L}kha^{H}mi	‘cow’
/g/	[g]	^{L}ga^{H}tia^{L}dre	‘old’
/q/	[q]	^{H}qa	‘cry’
/qh/	[qʰ]	^{H}qho	‘head’
/G/	[ɢ]	^{H}Ga^{H}mbo	‘box’
/f/	[f]	^{H}fu^{H}tʉ	‘rain’

摩擦音：

/s/	[s]	^{H}sɨ	‘blood’
/z/	[z]	^{H}zʉe	‘yak’
/sh/	[ʃ]	^{H}shi	‘pine tree’
/zh/	[ʒ]	^{L}zhi	‘water’
/sr/	[ʂ]	^{L}sra	‘classifier’
/zr/	[ʐ]	^{L}zrɨ^{H}ben	‘Japan’
/sj/	[ɕ]	^{H}sjʉ	‘garlic’
/zj/	[ʑ]	^{L}zji	‘house’
/x/	[x]	^{L}no^{H}xa	‘lining’
/g’/	[ɣ]	^{H}g’ɨ^{L}shi	‘yesterday’
/X/	[χ]	^{H}a^{L}Xo	‘food’
/G’/	[ʁ]	^{L}G’a^{H}rlo	‘chest’
/v/	[v]	^{H}vue	‘pig’

破摩音：

/ts/	[ts]	^{H}tsə	‘this’
/tsh/	[tsʰ]	^{H}tshi	‘thorn’
/dz/	[dz]	^{L}dzang^{H}pa^{L}lha	‘Avalokitesvara’
/tr/	[tʂ]	^{L}tro^{H}ntro	‘wild goose’
/thr/	[tʂʰ]	^{H}thri	‘interjection’
/dr/	[dʐ]	^{L}ci^{H}dro	‘wave’
/c/	[tɕ]	^{L}son^{H}ci	‘thrity’
/ch/	[tɕʰ]	^{H}chia	‘eat’
/dj/	[dʑ]	^{L}dja^{H}cha	‘street’

鼻音：

/m/	[m]	^{H}a^{H}ma	‘mother’
/n/	[n]	^{L}nɨ^{H}nɨ	‘milk’
/nj/	[ɲ]	^{H}nje	‘eye’
/ng/	[ŋ]	^{H}nga	‘1st sg.’
/hm/	[m̥]	^{H}hmə	‘man’
/hn/	[n̥]	^{L}gu^{H}hna	‘egg’
/hnj/	[ɲ̊]	^{H}hnje^{H}hnje	‘red’
/hng/	[ŋ̊]	^{H}hngə	‘gold’

接近音：

/l/	[l]	^{H}lə	‘wheat’
/r/	[r]	^{L}ri	‘mountain’
/w/	[w]	^{L}we^{H}ri	‘bear’

/hl/	[l̥]	^{H}hle	‘god’
/hr/	[ɹ̥]	^{L}hre	‘sand’
/j/	[j]	^{L}jo	‘interjection’

3.3　子音連続

以下の５つのタイプに分類される。語例は準備中のチュユ語語彙に関する別稿を参照されたい。

3.3.1　前気音型

- ^{h}p
- ^{h}t　^{h}th　^{h}ts　^{h}s
- ^{h}tr　^{h}trh　^{h}sr
- ^{h}c　^{h}ch　^{h}sj
- ^{h}k
- ^{ɦ}d　^{ɦ}z　^{ɦ}zj　^{ɦ}nj　^{ɦ}j
- ^{ɦ}m ^{ɦ}n　^{ɦ}l　^{ɦ}r

3.3.2　前鼻音型

- ^{m}ph　^{m}b　^{m}th　^{m}d　^{m}tsh
- ^{m}trh　^{m}dr　^{m}ch　^{m}drh　^{m}z　^{m}zd
- ^{m}ph　^{m}b　^{m}b
- ^{n}th　^{n}d　^{n}th　^{n}dr　^{n}d ^{n}ch　^{n}dj ^{n}dz
- $^{\square}$dʑ
- ^{ŋ}qh ^{ŋ}G
- $^{ŋ\circ}$k^{h}

3.3.3　閉鎖音型

- ^{p}t　^{p}th　^{p}ts　^{p}tsh　^{p}tr　^{p}trh
- ^{p}sh
- ^{p}c　^{p}ch　^{p}ts
- ^{p}sj
- ^{P}k
- ^{b}d　^{b}z　^{b}l　^{b}r　^{b}zh　^{b}zr
- ^{z}d　^{k}tr　^{k}sj

3. 3. 4　摩擦音型

- ^{s}p　^{s}ph　^{s}m　^{s}hm
- ^{s}t　^{s}ts　^{s}n　^{s}hn　^{s}l
- ^{s}c　^{s}k　^{s}kh　^{s}ng　^{s}qh
- ^{z}g　^{z}b
- ^{sh}tr　^{sh}trh　^{zh}zr
- ^{sj}t　^{sj}th　^{sj}m　^{sj}n　^{sj}nj　^{sj}hnj

3. 3. 5　接近音型

- ^{l}dz　^{l}v　^{l}m　^{l}n　^{l}G’
- ^{hl}l
- ^{r}b　^{r}v　^{r}d　rz
- ^{r}dz^{r}dr　^{r}dj
- ^{r}z　^{r}zh　^{r}zr　^{rz}j
- ^{r}m　^{r}n　^{r}nj　^{r}ng
- ^{r}G　^{r}G’

3. 4　韻母

3. 4. 1　単母音

	front			back
close	/i/	/ʉ/	/ɨ/	/u/
half-close	/e/			/o/
half-open	/ɛ/	/ə/	/ɔ/	
open		/a/		

3. 5. 2　R 化母音

/ir/, /ʉr/, /er/, /ar/, /or/, /ur/

3. 5. 3　鼻母音

in［ĩ］　ʉn［y］　ɨn［ɯ］　un［ũ］
en［e］　on［õ］
an［ã］

3. 5. 6　二重母音

/ie, io, ue, ua, ui, ʉi, ei/

4.　超分節音素

4. 1　声調の記述

先行研究の記述と今回筆者が収集したデータの基づく分析を比較する。

4. 1. 1　王天習の記述（新龍方言、王 1991：54-55）

1.［55］	high level	co^{55}	'to live'
2.［13］	rising	co^{13}	'spread'
3.［31］	falling	$pu^{55}tsha^{31}$	'bug'
4.［33］	neutral	$phə^{55}phə$	'grey'

・［55］ ⟶ ［53］ or ［54］ /____#
・［13］ ⟶ ［11］ or ［22］ /____ ［55］
　　⟶ ［35］ /____ ［13］, ［31］, ［33］

4. 1. 2　筆者の記述（理塘方言）

1.	high level （H）	hli^{55}	'god'
2.	low level （L）	hli^{11}	'toungue'

4. 2　Tone sandhi

H ⟶ L tone sandhi in prefixed verb roots

eg.

ta^{L}sho	‘go upwards’,	le^{L}sho	‘go downwards’,
ke^{L}sho	‘go inwards’,	g’e^{L}sho	‘go outwards’

5. 小結

以上、チュユ語リタン方言の音声・音韻を略述した。中華人民共和国四川省で話されている諸言語は社会的地理的条件から記述の全くない言語も幾つかあるが、最も研究の進展しているチュユ語もまだまだ研究の余地が残されている。音韻に関しても、特にリズム・イントネーションは重要な分野であり。チベット＝ビルマ諸語の比較歴史言語学的研究に非常に興味深いデータを提供してくれると確信している。今後はチュユ語の形態統語論（morphosyntax）の調査・研究にも従事する所存である。

謝辞

本研究遂行にあたり財団法人三島海運記念財団学術奨励金のご援助を賜った。ここに記して感謝の意を表する次第である。また現地調査でお世話になった中華人民共和国四川省甘孜蔵族自治州理塘県絨埧郷増達村の方々にも謝意を表する。

参考文献

戴庆厦，黄布凡，傅爱兰，仁增旺姆，刘菊黄．1991.『蔵緬語十五種』北京：北京燕山出版社.

黄布凡．1990.「扎壩語概況」『中央民族学院学報』4：71–82.

黄布凡．1991a.「扎壩語支」戴庆厦（編）pp.64–97.

黄布凡．1991b.「羌语支」馬学良（編）『漢蔵語概論』北京：北京大学出版社，vol.2，pp.208–369.

池田巧．2003.「西南中国〈川西民族走廊〉地域の言語分布：レファランス資料集」『国立民族学博物館調査報告』pp.63–114.

陸紹尊．1985.「扎巴語概況」『民族語文』1985．2：67-76.
西田龍雄．1993.「川西走廊言語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学辞典第5巻補遺・言語名索引編』東京：三省堂．pp.197–198.
Nishida, Fuminobu. 2005. On the pitch accent in the Namuyi Language. The 11th Himalayan Languages Symposium. 6-9 December 2005, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand.
白井聡子．2002.「川西走廊諸語概説—記述の歴史と現在の姿—」『中国研究論叢』2：56–72.
王天習．1991.「却域語」戴庆厦（編）pp.46–63.

【本稿は The 14th Himalayan Languages Symposium（於 Lund University, Goeteborg, Sweden、2008 年 8 月 21 日）における筆者の発表 A Phonology of Queyu の一部に補足・修正を施したものである。】